天理教における親神・天理王命の神名

澤井　治郎

はじめに

天理教において神名というとき、親神・天理王命（てんりおうのみこと）を指す場合と、親神の「守護の理」（はたらき）を説き分ける十柱の神名を指す場合とがある。本稿で問題とするのは、前者についてである。天理教の歴史において、親神の神名について文献の上では「てんりんおふのみこと」「てんりおうのみこと」「天輪王命」「天龍王命」「天輪王明神」「転輪王命」「天倫王命」「天理大神」「天理王命」など様々な表記がみられ、発音上はやや例外的な「天龍王命」（テンリューオウノミコト）を除けば、「テンリンオウ」と「テンリオウ」の二種類の呼び方が存在したことが分かっている［おやさと研究所, 1997：216］。それをめぐって、おもに天理教外の研究者[1]によってさまざまな見解が提示されてきている。したがって、神名をめぐるいくつかの解釈を、詳細に文献資料を整理した早坂正章、仙田善孝の成果と合わせて概観して整理し、その上でどのように解釈することができるかについて最後に若干の考察を加えることにしたい。

『おふでさき』にみる親神

まず、教祖中山みきの直筆として残されている『おふでさき』（全17号1711首、明治２年から15年に執筆）によって、天理教における親神について概観しておきたい。『おふでさき』においては、親神が一人称で書かれており、その呼び方は「神」から「月日」、「月日」から「をや」へと三つの呼称をもって説かれていることが明らかにされている[2]。それは次のように説明されている。

はじめは従来から使いなれてきた「神」という言葉によって話されながら、

1　天理教の神名をめぐる議論に関して、天理教団の内と外とではかなり解釈が異なることから、ここではひとまず天理教内と天理教外という表現を用いて区別する。

2　この点が明らかにされたのは、中山正善『「神」「月日」及び「をや」について』においてである。

世間普通の神ではなく、この世をはじめた「元の神」であり、今も変わることなく人間を守護している「真実の神」であると、言葉をそえて説明された。つぎに、「月日」という言葉によって、「真実の神」は「月日」であると説かれ、世界をわけへだてなく温みと潤いをもって万物を守護されているのが親神であって、「月日」こそ親神の天にあらわれた姿であると目に示して教えられた。さらに、「をや」という言葉によって、親神と人間は、親子であると説かれ、人間から親神をみれば何事も打ち明けてすがることのできる親身の「をや」であり、親神から人間をみれば可愛い子供であると、身近で親密な関係を教えられた。[おやさと研究所, 1997：215]

このように、親神は八百万の神々のうちの一つのような存在ではなく、人間や世界を創め、今も守護している神であるとされ、その姿は天においては万物に「温みと潤い」をもたらす「月日」として表されるとともに、さらに「をや」と表して、人間との親しい親と子の関係にあることが説かれている。その親神の呼び名については、

いまゝでハ月日とゆうてといたれど
もふけふからハなまいかゑるで

『おふでさき』14：29［教会本部, 1974：392］

とあるように、意図的に使い分けられており、「教えを聴く人間の側に立って理解しやすいよう、3種類の名称をもって親神を説かれ」[おやさと研究所, 1997：215] ている[3]。

天理教における親神は上のように述べられているが、『おふでさき』には、その親神の神名は出ていない。年代的には『おふでさき』に先立って、「つとめ」の地歌として教えられた『みかぐらうた』[4]には、第1節に「てんりわうのみこと」[教会本部, 1974：733] あるいは第5節（九下り目八つ）に「てんりわう

3　『おふでさき』全17号のうち、「だいたい第6号の半ばまでは『神』、そのあと第14号のはじめまでは『月日』、それ以後は『をや』」と使い分けて説かれている［おやさと研究所, 1997：215]。

4　『おふでさき』とならぶ原典の一つ。全5節から成り、慶応2年(1866)から明治15年(1882)に成立している。

のつとめする」［教会本部，1974：766］と出ている。『みかぐらうた』も『おふでさき』と同様、教祖によって書かれたものと考えられているが、現在その原本は見つかっていない。しかし、それは歌であるから、そのリズムとともに歌い継がれると同時に、慶応年間から当時の信者がその歌を筆記した写本などが残されている[5]。それらの古いものでは、現在「てんりわう」とされている部分が、「てんりんわう」と表記されている。これに着目してのことか、天理教外における天理教研究においては、その神名は仏教の転輪王に由来するのではないかという主張がなされてきた。まず、そうした解釈を概観することからはじめたい。

「転輪王」との関連を指摘するもの

天理教外における天理教研究の先駆的存在である村上重良は、その初期から晩年にいたるまで多くの著書の中で、「てんりんおう」は仏教の「転輪王」に由来するものだという見解を繰り返している。その最初期のものは『近代民衆宗教史の研究』である。その中で村上は、「てんりんおう」の発想は仏教の「転輪王」によるもので、「転輪王の教義内容よりも、『天の将軍』『天りん王』の字音・語感からくる、神の偉大な力と、現実の支配権力――将軍・王――との連想によって、この神名が固定していったのであろう」とし、さらに「てんりんおう」に神道的な「みこと」を付するようになるのは、維新前後、神道が圧倒的に優越してゆく時期にあらわれる天理教の「神道化」の反映であると述べている［村上，1963：119］。その後も、教祖中山みきの仏教への傾倒を強調しながら、「てんりんおう」は「浄土信仰のさかんなこの一帯でひろく信仰されていた、仏教の『十王』のひとつで須弥四洲（全世界）を統治する転輪王に由来する神名」［村上，1971：606］であると述べるなど、多くの著書で同様の記述を繰り返している[6]。その影響から、他の研究者が明治期の宗教史について論

5　「主なるみかぐらうた本一覧表」を参照のこと［道友社，2001：34－35］。
6　同氏による同様の記述は、他にも村上『日本の宗教』（岩波書店、190頁）、村上『新宗教――その行動と思想』（岩波書店、7、74頁）、『みかぐらうた・おふでさき』（平凡社、271頁）、『神と日本人　日本宗教史探訪』（東海大学出版会、125頁）などに見られる。

じる著書や論文において、当時の宗教状況の一つのモデルとして天理教にも触れ、その神は仏教の「転輪王」に由来し、明治維新の前後から、仏教的要素を排して漸次「神道化」を進めていったと述べているものが少なくない[7]。

ただし、「転輪王」との関連は村上によるオリジナルな解釈なわけではない。村上に先立って高木宏夫もその関連に言及しているし［高木，1954：293］、大正14年（1925）に加藤咄堂は「転輪王」から「天理王」に改まったと述べている［加藤，1925：415－416］。それ以前にも、明治20年代頃から、仏教者による天理教批判の書物が多数出版される中で「天理王」は仏教に由来するというものがあらわれているが[8]、そうした流れからこの解釈は出て、村上らの取り上げるところになったのではないかと考えられる。

二代真柱中山正善の講義より

これまで見てきたように天理教外の研究者の間では、おもに「転輪王」という仏教からの影響を指摘するものが多い。それでは天理教内の信仰の場ではどのように捉えられているのだろうか。昭和31年３月８日から10日間、当時編纂が進められていた『天理教教祖伝稿案』（第21稿）について二代真柱中山正善が講師となって「第十六回教義講習会第一次講習」が開かれた。その質疑応答の中で受講者から、「今の『てんりわうのみこと』に関連することで、『てんりんわうのみこと』とよく文献にも出ておりますし、転輪王講社というのも出ておりますが、単に語呂が似ておるところから、そう言われたのでしょうか、またほかに意味があるのでございましょうか」［中山，1997：234］という質問が出されている。こうした質問が提起されることから察するに、当時、天理教の信仰者にとってもこの神名の問題は疑問の種であったと考えられる。中山正善はまずその場にいた本部在籍者の桝井孝四郎と諸井慶徳に見解を述べるように

7　たとえば山折［1985：80］や平井［2005：230］など。村上を参照しながら、「転輪王」に由来し、「神道化」してきたとの理解が踏襲されている。

8　例えば羽根田［1893：12］や林［1896：13－14］。飯田照明は、その他明治期における仏教者による天理教批判の文献で「転輪王」との関連が記される例を挙げ、それらは「恐らく天理教は、仏教に由来し、仏教の系列の下に連なる教えであったと主張するためであろうと思われる」と述べている［飯田，1991：90］。

求めたようである。二人は次のように意見を述べている。

【桝井孝四郎】

これは初めから「てんり」であるべきものであると聞かせていただいております。（中略）私の家に元治元年の講社づとめのめどを頂いております。その書は秀司先生の書と聞かせていただきまして、今天輪王命[9]とはっきり書いてございます。しかし、これはそう書いておりますのでございますけれども、言うまでもなく、天理であると聞かせていただいております。

【諸井慶徳】

私はおふでさきにおいて、理ということを仰せくださっておりますから、（中略）もちろん理であるということは、本質的に明らかであることと思いますが、（中略）古い書物、特に明治十八、九年、みかぐらうたに大抵、倫ないしは輪になっておるのが多いように思いますが、こういうふうにいろいろ出ておるということ、それ自体が発音の上からの結果が一つの理由ではないか。もう一つの理由は、一番下にお書きいただいた転輪、これは仏教に出てくる字でありますが、これも一応の推測されるものであると思います。けれども私は、自分の考えで悟りますのは、いろいろの漢字が出ておるということは、漢字を当てたのではないか、特にこの俗称に「てんりさん」と言われる場合などの言い方などになりますと、「てんりんさん」というような言い方に非常に近づいて聞かれるものでありますので、「り」というものを「りん」というふうに発音的に転訛することは十分あり得るのではないか。［中山，1997：234－236］

桝井は、自身の家には教祖の長男である中山秀司の書とされる礼拝の目標（めど）のお札が残されていて、そこには「天輪王命」[10]と書かれていると述べている。しかし、そうした点にもかかわらず「これは初めから『てんり』で

9　実際の引用文においては「天倫王命」と表記されている。しかし、仙田の調査によれば、「桝井幸吉先生に直接お伺いしたところ、桝井家の目標札に書かれている神名は『天輪王命』であることが判明した」とあり、これは口頭で述べられたものを文書化する際に変換ミスされたものと考えられ、実際には「天輪王命」である［仙田，1991：57］。誤解を避けるため、ここではあらかじめ「天輪王命」と表記する。

10　（注9）を参照。

あるべきもの」であり、「言うまでもなく、天理であると聞かせていただいて」いると語っている。諸井は二つの側面から「てんり」が本来のものであることを述べている。一つは教祖が原典『おふでさき』において「理」ということを説いているという教理的側面、もう一つは「てんりんさん」という発音的な転訛という側面である。ここで二者によって出された三つの見解は、単に桝井や諸井の個人的な見解を披歴したものではなく、この問題に対する天理教内での考え方の代表的なものになっている[11]。

これに対して中山正善は、『おふでさき』の「理」と結びつける見解については、「『り』はあっても『てんり』という言葉はありませんので、おふでさきの中には、この言葉を求めるわけにはいかない」、また訛りという見解については「私の解釈ではどっちが正しいか正しくないか、そういうような問題ではなしに」と前置きして、「天とか理によって云々という点から考えれば、『てんり』が訛って『てんりん』と言うたのだという解釈もつきますが、文献の上からは、『りん』のほうが先に見えるようであります」［中山，1997:236－7］と、こうした見解に一応の反証を与えている。

また、中山正善は、天理教外の研究者の間で広まっている「天理王命」が「転輪王」に由来するという説にも触れている。天理教は、明治13－15年（1880－1882）に地福寺配下の「出張所転輪王講社」[12]を設けており、そこに「転輪王」

11　『おふでさき』における「理」については、「このよふハりいでせめたるせかいなり　なにかよろづを歌のりでせめ（1－21）」［教会本部，1974：8］、「いまゝでにふでにつけたることハりが　さあみゑてきた心いさむで（12－44）」［教会本部，1974：309］とある。これが「天の理」という解釈の典拠となっており、教祖の話として「てんりんおふのみことふのなまいつけたのハ、てんりにかのふたゆへ、（後略）」（説話体十四年本、明治14年手元本）［中山，1957：85］とする資料が残っている。また信仰上、神は立教から一貫したものとする典拠には、例えば原典の一つ『おさしづ』において「天理王命というは、五十年前より誠の理である」（明治21年1月8日）とある［教会本部，1974：795－796］。そして、「てんり」の転訛とする説は、例えば高野友治による「漢字で書いて『天理王命』であったか『転輪王命』であったか。漢字で書いて、眼で見ると、違うという意識がはっきりするが、耳で、『てんりおーのみこと』も『てんりんおおのみこと』も、違うという意識がなかったのでないか。大和の、とくに北大和の人々は『ん』を挿入して読みやすくして読んでいる。「富堂」（トミンド）、「井戸堂」（イドンド）、「蔵之庄」（クランショウ）…など、「ん」と付けたり、「の」を「ん」に変えて発音している。「テンリ」より「テンリン」が言い易いのであろう」［高野，2012：207］（元は、雑誌『創象』14号、1982年に発表）という指摘がある。

12　当時の官憲による取り締まりを逃れ、「公認宗派の配下になれば、官憲の干渉もなかろう

という表記がある。しかし、その時期以前に、天理教内で既に「てんりさま」ないし「てんりんさま」という言葉が用いられていたなら、「天理王命」の神名について「そっち（＝転輪王）から名前が出たということは、ちょっと早計である」と述べている［中山，1997：237］[13]。

そして、「われわれの教会として、われわれの立場上、使っております上で、現在は『天理王命』を使っておりますので、これを文字の上においてでは正しいもので、または『てんり』と発音するのが正しいものと、かように解釈していただいて、歴史的には転訛であるかどうかは、その説は、いろいろ取れましょうが、『てんりん』と書いた時代も、『てんりん』と発音した時代もあると、どちらが先か後か、どちらが正しいか誤りかというような問題にはふれずに、さようにお考えいただきたい」［中山，1997：239］と述べている。

文献資料から

上記の通り、二代真柱中山正善は「転輪王講社」を設けた一時期以前に、天理教内に「てんり」や「てんりん」という言葉があったなら、「天理王命」の神名が「転輪王」に由来するという説は「早計」だと述べている。それでは、資料の上ではどのように整理されるだろうか。天理教関連の文献資料の上から、早坂正章（1981）や仙田義孝（1991）はこの神名の問題について詳細な文献資料を挙げた研究成果を発表している。それらによると、神名を記す最も古い資料として、上述の桝井孝四郎の家にのこる「守札」が挙げられている。そこに「天輪王命」と書かれてあり、それは「元治元年、桝井家の講社づとめの目標として下げられたもので、秀司先生筆と伝えられている」［仙田，1991：57］とある。それは「伝えられ」たものであって明確な日付等は不明だが、明治期

と考え、また、人の勧めもあり」、教祖の長男秀司が「金剛山地福寺」に願い出て、表向きは仏式にして、信者が自由に参拝し、教祖中山みきに官憲の取り締まりが及ぶのを避けようとしたもの。しかし、教祖は「そんな事すれば、親神は退く」と厳しく戒めたとされる［道友社，1993：225］。ちなみに、地福寺は、もと金剛山行者坊と号し現在は高野山真言宗。明治４年（1871）神仏分離によって金剛山転法輪寺が廃寺となるとき、その本尊である法起菩薩を末寺である地福寺に移したという［松隈，1975：155］。

13　（　）内引用者付加。

以前から「天輪王命」の神名が用いられたことが示唆されている。明確にその年代日付を示すものとしては、慶応元年（1865）11月11日付けで大和神社神主「市磯相模守」に宛てられた「御請書」において「仍而ハ已来前顕鳴物ノ品々ヲ以天龍王命様と申唱へ、馬鹿踊りと称し」［教祖伝編纂委員，1957：327］とあり「天龍王命」と記されている[14]。その他、資料としては慶応３年頃「天輪王神」「天輪王明神」「天輪王命」という表記があらわれている。また、明治初期から多くみられる『みかぐらうた』の写本においては、漢字表記ではほとんどが「天輪王命」と表記されている［仙田，1991：65］。

変化が現れるのは、明治13－15年（1880－1882）地福寺配下の「転輪王講社」の時代である。この間に、地福寺や警察署に提出された対外的な文書には「転輪王ノ命」や「転輪王命」という神名が出ている。ただし、この期間中に丹波市警察署や奈良警察署へ宛てられた書類には「転輪王」となっているが、それ以外の書類や『みかぐらうた』写本等では神名が「天輪王命」と記されるものがほとんどである［仙田，1991:24－27,65－67］[15]。早坂は、「転輪王命」という神名が採用されたことについて、「以前から称えてきた『天輪王命』に発音上、対応するものとして、仏教の『転輪王』を代置したものと思われる」［早坂，1991：154］との解釈を提示している[16]。天理教内の文献資料において、神名を「転輪王」とするものは、この地福寺配下の約２年の間以外には見いだされず、また、この期間中にも警察や地福寺宛ての資料以外には「天輪王命」という表記がされていることから、「『転輪王命』があくまで金剛山地福寺との関係の下

14　元治元年（1864）現在の天理教会本部の場所で普請中であった「つとめ場所」の上棟式が行われ、その祝いに信者の一人山中忠七宅へ行く途中、大和神社前で鳴物とともに神名を唱えたことで、神職の怒りをかい、鳴物没収と社務所へ３日間留め置かれたという、通称「大和事件」の一年後鳴物等が返却された際の資料。ただし、「馬鹿踊りと称し」などの文章表現から「鳴物受け渡しの手続きの際に立ち会った第三者によるものではないか」［仙田，1991：22］とされる。

15　仙田論文にあげられた資料の内、例外は一点「拾二下り御勤歌」（明治14年６月）のみ。

16　この時の事情について、教祖の高弟の一人である清水由松は、「私は後日、御本席に、あれはどうしてかとお聞きすると、“あれは秀司先生がそうせられたものである。これは、金剛山地福寺の僧がつけたのであって、仏教で、転輪とは、旋転する輪宝の力に依って世界を治める神話の王という意味で、大変結構な文字という處から転輪王如来とせられた”といわれました」［清水，1948：43］という回顧談を残している。

で用いられた特殊な表記にすぎない」し、「文献にあらわれた神名を整理する限りにおいては、本教の神名の由来を仏教教説上の『転輪王』に結びつけて考えることは不可能である」[仙田，1991：71]とされている。

こうした資料からみるに、「転輪王命」が現れる以前から、「天輪王命」という神名が天理教内において定着している。それが、明治18年、大阪府知事宛てに「天理教会結収御願」（明治18年４月29日）や「神道天理教会設立御願」（明治18年７月３日）が提出される中で、教会名が「天理教会」とされるようになる[17]。後者の「設立御願」に添付された書類の一つに『改正諭告』があり、このなかで「従来吾奉教主神を総称して南無天輪王命と唱へたり是中頃僧侶の浸領したるより此称あるものにて南無の言たる梵語なり天輪王命たる神名にあらず爾後古号に復帰して天理大神と尊称すべし」[神道天理教会創立事務所，1885：３]として「天理大神」に改められている。明治19年に神道本局へ提出の「最初之由来」においては「天理王命」と記されており[諸井，1947：39]、その頃から天理教団内の文献資料において「天輪王命」は姿を消し、「天理王命」と表記されるようになっていく[18]。

「天輪王」と「天理王」

以上概観してきたように、天理教における親神の神名において、資料上「天輪王」から「天理王」への移り行きが認められる。

早坂は、「天輪王」について、「さらにその称名の意味するところは、『こふき話』本[19]に『くにとこたちの命わ、天にてわ月様なり……おもたりの命様わ、てんにてわ日輪様……』（明治十六年桝井本）とある通り、『天輪』とはこの『月

17　これらは、政府に教会設置公認の出願をした最初のもので、両方とも却下されている。

18　ただし、明治41年（1908）に認可されることになる天理教一派独立に向け、神道学者井上頼圀や逸見仲三郎の協力によって明治36年（1903）に編纂された『天理教教典』（通称「明治教典」）やその当時から第二次大戦後までの「天理教教規（及規程）」には「天理大神」と記されている[早坂，1991：174－175]。

19　明治13、14年（1880－1881）頃、教祖中山みきが「取次」と呼ばれる側近の信者にまとまった話を説き聞かせた。明治14年頃に「こふきを作れ」と指示し、それを聞いた信者がその話をまとめ、手書きしたものを「こふき本」という[おやさと研究所，1997：311－312]。

輪・日輪』の意であって、まさに月日親神の称そのものと解される」[早坂, 1981：117] と論じている。「月日」とは『おふでさき』の６号から14号において「神」を表すために使われる呼称であり[20]、「こふき本」においても多くみられるものである。また、「天輪王命」から「天理王命」への変遷について、「月日親神の具象的称名ともみられる『天輪王命』を、親神の守護の象徴的称名ともいえる『天理王命』へと改称された」[早坂, 1981：127] と述べて、それらが「親神」を指すものであることは同じながら、それが意味するところに相違をみている。

明治14年から同20年にかけて、教祖中山みきが説いた話を当時の側近の信者に書き取らせた「こふき本」が残されている。そこには、神名の由来に触れたものがあり、「説話体十四年本（手元本・二）」には、「てんりんおふのみことふのなまいつけたのハ、てんりにかのふたゆへ、このやしきにつけてをくとの事」[中山, 1957:85] と記されている[21]。ここでは、「てんりんおふのみことふ」の神名が「てんり」(天理)の意味を込めて説かれていると解される。さらに、『おふでさき』第１号（明治２年）に、その執筆の意義を記した箇所において、

このよふハりいでせめたるせかいなり
なにかよろづを歌のりでせめ

『おふでさき』１：21［教会本部, 1974：８］

と、この世の万物について「り」（理）によって説くと宣言している。

そもそも、「天輪王命」や「天理王命」という表記に関して中山みきの直筆や、どのように書いたという話は残っていない。直筆のものとして残っている『おふでさき』を見る限り漢字よりも平仮名が圧倒的に多く用いられているし、上

20　『おふでさき』において、「月日」の用例は第６号からあらわれており、それは明治７年12月にあたる。

21　中山正善『こふきの研究』より引用。手元本とは、中山家の手元に残されていたとの意味。引用と同様の記述は、「十六年本（桝井本・五）」に「こゝろを天りにかのたゆゑに、みきのかわに（かのふたゆゑに、みきのかわりに《重複》）このやしきに天輪王の命となをさつけ」［中山, 1957：126］とある。さらに、明治16年10月の「神之最初之由来」には、「天倫王命と名をつけたまふハ〔、〕右みきのこゝろを天理にかのふたるゆへに」［諸井, 1947：13］と出ている。〔　〕で括った句点は1957年『復元』誌に掲載されたところには無い［集成部, 1957：８］。

記の「こふき本」における神名の由来にしても、口で語ったものを当時の信者達が文字にしたものである。漢字で「天輪王命」や「天理王命」と書けば、意味が大きく異なってくるように感じられる。しかし、それは元来、口で説かれ、あるいは、「つとめ」の地歌として歌われ、それに漸次漢字があてられたものと考えられる。そうした点を考慮すれば、「天輪王命」や「天理王命」の元々の意味やその違いについて現在明らかになっている限りの資料によって実証的に云々することは不可能に近い。だが、明治18年頃から本格化する天理教の教会設置、公認運動の中で、「天理大神」「天理王命」という神名へ改称されていっている。このことには、当時、明治政府によって明治５年に発布された「三条の教則」に「天理人道ヲ明ニスヘキ事」との文言があることや、以前から教祖中山みきが「理」あるいは「天理」という表現をもって親神の教えを説いてきたということが関係していると考えられる。

おわりに

以上のように、天理教の神名をめぐる議論を整理してきた。村上重良による研究においては、天理教の神「天理王命」は仏教の「転輪王」に由来し、それが漸次「神道化」してきたものだとされた。それが、後の明治宗教史を概観する議論において頻繁に参照されてきている。しかし、残された歴史的資料を詳細に整理した、早坂正章、仙田義孝による研究から、天理教の神名を「転輪王」とする資料は、官憲からの迫害を逃れるため明治13－15年の「金剛山地福寺配下転輪王講社」として、仏教寺院の配下にあった時期に限定されること、それ以前（慶応年間頃）から神名を「天輪王命」とする資料があり、「転輪王講社」の時期にも、「つとめ」の地歌である『みかぐらうた』の写本には、「天輪王」と記すものがほとんどであることから、天理教の神名が「転輪王」から来たとの説は論拠を欠くものであり、「天輪王命」の表記が明治維新前から定着していることが明らかにされた。

「天理王命」が「転輪王」に由来し、漸次「神道化」してきたという村上による説は、当時の明治政府による「神道国教主義」あるいは国家神道を中心と

した「国民教化政策」や「廃仏毀釈」運動が盛んであった時代的な枠組において、天理教などの村上が「民衆宗教」と呼ぶ宗教も仏教的要素を排して「神道化」を図る教団運営を強いられたことを示そうとするものである。教祖中山みきの幼少からの浄土信仰を強調したり、神の由来を仏教に求めたりするのもそのためであろう。しかし、実際には、それは宗教の展開を当時の社会情勢に還元してしまう傾向がある。

本稿で取り上げた天理教の神名に関していえば、明治18年に教会設置に向けて提出された『改正諭告』において、「天輪王命」の神名について「是中頃僧侶の浸領したるより此称あるものにて（中略）爾後古号に復帰して天理大神と尊称すべし」と述べられるところに、仏教から神道へという当時の情勢[22]への意識が見受けられることは確かであろう。

しかし、この頃から神名の表記が「天輪王命」から「天理王命」へ改まっていくことには、「神道化」や「三条の教則」というような教団にとっては外圧的な側面のみならず、明治14年頃から教祖中山みきが神名の由来について「てんりんおふのみことふのなまいつけたのハ、てんりにかのふたゆへ」と説いているように、当時の信者による「てんりんおふのみことふ」の意味は「天理」であるという認識の深まりが[23]、教会設置を契機とする「天輪王命」から「天理王命」への改称に結びついているという教団の内在的な側面があったと考えることができる。

参考文献

飯田照明『お道の弁証――護教論への試み』飯田照明編集発行、1991年。

加藤咄堂『民間信仰史』丙午出版社、1925年。

岸本英夫編『明治文化史　第６巻宗教』原書房、1979年。

22　岸本英夫編『明治文化史第６巻宗教』において、「明治維新の原理となり、明治新政をになった新支配階級の思想となり、明治新政の理想ともなった」ものとして「復古派神道者の国学思想」が挙げられ、それは「仏教に対する批判と、儒教に対する批判の二つを礎として、成り立ったもの」と述べられている［岸本，1979：54－56］

23　それは、（注20）で挙げた諸資料の「てんり」の文字が、次第に「天り」、「天理」と改まっていくところに見られる。

教祖伝編纂委員「御教祖伝史実校訂本（中二）」『復元』第32号、天理教教義及史料集成部、1957年。
神道天理教会創立事務所『改正諭告』1885年。
仙田善孝「神名『天理王命』の資料の整理」『天理教校論叢』第24号、天理教校本科研究室編、1991年。
高木宏夫「宗教教団の成立過程――天理教の場合」『東方文化研究所紀要』第6冊、1954年。
高野友治『教祖余話』高野眞幸編集発行、2012年。
天理教教会本部編「おふでさき」「みかぐらうた」「おさしづ（抄）」『天理教原典集　附天理教教典』改修版、天理教教会本部、1974年。
天理教教義及史料集成部「神之最初之由来」『復元（天理教教祖伝叢書一）』第31号、天理教教義及史料集成部、1957年。
天理教道友社編『ひながた紀行――天理教教祖伝細見』天理教道友社、1993年。
天理教道友社編『みかぐらうたの世界をたずねて』天理教道友社、2001年。
天理大学附属おやさと研究所編『改訂天理教事典』天理教道友社、1997年。
中山正善『「神」「月日」及び「をや」について』養徳社、1935年。
――――『こふきの研究　成人譜その三』天理教道友社、1957年。
――――『第十六回教義講習会第一次講習録抜粋』天理教道友社、1997年。
早坂正章「親神称名私考」『天理教学研究』第21号、1981年。
――――「国家神道体制下における天理教団――教祖在世期の教義展開にみる二面性について」、石崎正雄編『教祖とその時代――天理教史の周辺を読む』天理教道友社、1991年。
林金瑞『實際討論　辯斥天理教』第3版、其中堂書店、1896年（初版1893年）。
羽根田文明『天輪王辨妄』法藏館、1893年。
平井直房「近代の開幕と新宗教運動」、堀一郎編『日本の宗教』原書房、2005年。
松隈青壺『おぢばへの道――教祖御伝ゆかりの地をたずねて』天理教道友社、1975年。
村上重良『近代民衆宗教史の研究』第2版、法藏館、1963年。

————「中山みきと天理教」、村上重良、安丸良夫『日本思想大系67　民衆宗教の思想』岩波書店、1971年。
————校注『みかぐらうた・おふでさき』平凡社、1977年。
————『日本の宗教』岩波書店、1981年。
————『神と日本人　日本宗教史探訪』東海大学出版会、1984年。
————『新宗教——その行動と思想』岩波書店、2007年。
諸井慶徳「原初天理教に於ける表明文書」『復元』第4号、天理教教義及史料集成部、1947年。
山折哲雄「日本人の宗教意識」、歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史13　歴史における現在』東京大学出版会、1985年。

On the Name of God the Parent, "Tenri-Ō-no-Mikoto," of Tenrikyo

Jiro SAWAI

Tenrikyo was founded by a woman of an agricultural household, Miki Nakayama, in a rural village of Nara, Japan (present Mishima cho, Tenri city, Nara prefecture) in 1838. It is known as one of the oldest of so-called "new religions" in Japan.

Tenrikyo followers often use the phrase "God the Parent" to refer to God and, in praise and worship of God, they call out the divine name "Tenri-Ō-no-Mikoto." So, the name of God is called as "Tenri-Ō-no-Mikoto" (天理王命) in Tenrikyo. But when we see the history of Tenrikyo, we find that the diverse names were used in historic documents and materials. They are such like "Tenrin-Ō-no-Mikoto," "Tenryu-Ō-no-Mikoto," "Tenri-Ōkami" and so on, which are written in Chinese character as 天輪王命, 転輪王命, 天龍王命, 天理大神 or so.

Researchers outside Tenrikyo are apt to think the divine name "Tenri-Ō-no-Mikoto" derives from Buddhist deity "Tenrin-Ō" (転輪王) and has been changed to go well with Shinto since the Meiji Restoration. However, when we see the historic documents more carefully, the name "Tenrin-Ō-no-Mikoto" (転輪王命) is only found in the period (1880-1882) which Tenrikyo was temporarily belonged to a Buddhist temple in order to cope with the oppression by the authorities. There were not a few documents which express God as "Tenrin-Ō-no-Mikoto" (天輪王命) before the Meiji Restoration in 1868, and it was used in most documents till around 1885. This was the time Tenrikyo seriously started to try to establish the Church and obtain permission by the government. After that, "Tenri-Ō-no-Mikoto" or "Tenri-Ōkami" took the place of "Tenrin-Ō-no-Mikoto" in most of all documents. But not just the oppression from the authorities, but the internal development of doctorinal understanding in Tenrikyo group might be considered to have affected this transition.